



2012
秀作

第10回「金融と経済を考える」高校生小論文コンクール

笑って 生きて ^い 生きる

東京都・中央大学高等学校 3年 田村 千里

私は将来、難病を持つ子どもたちに携わりたい。きっかけとなったのは、赤ちゃんのときのことだ。私は、心房中隔欠損症で生まれてきた。何度も呼吸困難になったらしい。心臓の病気で手術する子どもも多い中、私は特に手術もなく、今元気に生きていることができている。小さい頃は^{すご}その凄さも考えたこともなかったが、本当に奇跡に近いことだと思う。そんな私ができることはなんだろうかと思ったときに見たテレビ番組があった。その番組は日本中で難病と闘っている子どもたちの特集がされているものだった。まっしろの病室に楽しそうなぬいぐるみや、家族や動物が不器用に描かれた絵が飾られ、にこにこ笑う少女の姿は普通の子どもとなにも変わらない。しかし体中にはたくさんの管、注射の痕、呼吸器……そして、まるでさっきまでのかわいい女の子から生気を悪魔が吸い取ったように、苦しんで声にならない声で訴える姿が映し出されていた。それを見て、私も死と隣り合わせを経験したが、大切なものを忘れていたことに気付かされたのだ。もしかしたら、自分もあの少女のように小さな力を精一杯ふりしぼって、闘っていたのかも知れない。そのとき、難病と闘う子どもたちになにか力になれないのだろうかと思った。私の助かった命を彼らのために使うのが使命でないかと思ったのだ。ただぼんやりと職業も分からないまま、必ず彼らの役に立ちたいと強く思っていた。しかし中学2年のときの授業が私を変えることになる。

それは、道徳の授業で見たビデオに出てきた1人のピエロである。でも、ただのピエロではない。ホスピタルクラウンと呼ばれ、闘病中の子どもたちの前に現れ、そして笑顔に変えてしまう魔法使いのようなピエロである。決して普通のピエロが病院に登場しているわけではない。もちろんプロとしての力は抜群、しかし子どもの様子を汲み取り、子ども主役で行動しなければならないし、苦しむ子どもに対して動揺などしてはいけない。一見簡単そうと思えるが、実際髪^の抜け





落ちた姿や薬の副作用と闘う姿に可愛いそうと思ってしまい、笑わせることなどできなくなってしまう人もいるそうだ。しかも、また来るねなど何気なく使う言葉も発してはならない。次に会うときも病気と思わせてしまうおそれがあるからである。そして彼らの仕事は決して金儲けではない。0円で行われるのだ。仕事としては、とても大変なものだと思う。しかし、私はこんなに素晴らしい仕事はないとまで思った。笑顔にするというのは簡単ではないが、子どもたちに楽しさや元気、夢を与えることができる。治療に対しての勇氣にもなる。笑うことの力は無限大なのだ。子どもたちだけでなく、看病でストレスを溜めた親も笑顔になるという。やはり子どもの笑顔は親の幸せなのであろう。長い病院生活で、病気を治していくというメリットはあるが、楽しさやおもしろさは与えてくれないし、感情表現も少なくなっていく。遊び盛りの子どもにとっては致命傷であろう。私はホスピタルクラウンという仕事に興味を湧き、調べてみたところ、驚くべきことが分かった。ホスピタルクラウンの活動は日本では活発ではないらしく、ピエロの数もまだまだ少ないという。

日本は経済的発展を続け、医療技術も進んでいる。しかし、病気の子どもに対して、それだけでいいのだろうか。また身体的にも精神的にも疲れているのは、闘っているのは子どもだけでなく家族も同じである。病院に入院、手術、治療には莫大な費用もかかり、あらゆる面から心の余裕を無くしていく。補助金制度などもあるが、それだけでなく、国民みんなが笑って生きて、生きることのできる国を目指して行くべきである。いろんなところで平和とうたわれているが、本当の平和というのはこういうことだと私は思う。今の日本だからこそ必要なのだ。

私は病気と闘う子どもたちにできることは、病院では得ることのできないものを教えることだと考える。子どもたちの力になることで一緒に闘いたい。一緒に笑いたい。そのために、ホスピタルクラウンを広めていく活動に携わりたいと考えるようになったのだ。クラウンになるだけでなく、サポーターというものもあって、クラウンの仕事の役に立つこともできるようだ。さきほど述べたように、クラウンの仕事は0円である。私はやりたいこととしては見つかったが、どうやって自分自身の生計を立てるのかという問題が浮き上がる。そこで私の性格を考えることにしてみよう。私はお笑いが大好きである。これはホスピタルクラウンの仕事に役立つと思う。中学生のときは勉強を教えることが好きだった。





勉強と子どもを考えたとき、ひとつの職業が思いついた。病院内学級の教師である。これなら、勉強以外のことも教えられるのではないかと思った。楽しいこともおもしろいこともだ。子どもと近い立場で接することもできる。私は生きることの楽しさも希望も含め、勉強を教えられる教師になりたいと思う。そしてホスピタルクラウンのサポーターとなり、活動の参加もしたいと思っている。また、人を笑わせるには自分も笑っていなければならないと考える。だから私はいつも笑っていて、接しやすい人間になろうというのも目標にしている。自分の夢を叶えるには、まずは大学で病気と闘う子どもたちをサポートできる専門知識と資格を得なければならない。しかし、私の夢は夢でなく、使命だと感じているので、簡単にはあきらめない。難病と闘う子どもたちの力になるため、私も闘っていきたい。みんなが笑って生きながら、生きていくために、まずは一歩踏み出そうと思うのだ。日本にとっては、私一人など微力かもしれないが、もし私の使命が日本の力になるのであれば、私はうれしい。

<参考文献>

- ・大棟耕介『ホスピタルクラウン 病院に笑いを届ける道化師』サンクチュアリ出版、2007年
- ・川田自動車「僕の病院にピエロがやってきた。病気の子どもたちへ笑いを届けよう！ホスピタルクラウン」
URL <http://www.g-kawada.com/library/story/clown.html>

